

プロフェッショナル
日本語
2019年・春学期

JAPN 135C
クラスポートフォリオ

子供の貧困
レッツ・言語



子供の貧困

メンバー紹介

			
<p>オイ・ウオング 4年生 専攻：コミュニケーション 副専攻：日本学</p>	<p>ヴィエット・デュ オング 1年生 専攻：生物学</p>	<p>エリック・ザオ 4年生 専攻：比較政治学 副専攻：日本学</p>	<p>アプルワ・シュク ラー 3年生 専門：認知科学 副専攻：日本学</p>

プロジェクトの背景と概要

私たちは日本語の授業の一環として「子供の貧困」というテーマでプロジェクトをした。近年子供の貧困は日本で社会問題になっていて、貧困が子供の自己肯定感の低下や自立の妨げになることがわかった。子供の貧困問題は私たちが直接に解決できる問題ではないが、自分たちは何ができるかを考えるために、冬学期の活動の延長として、私たちのグループは日本人の子供たちにインタビューをして、そのインタビューの結果を活かして、絵本を作ることに決めた。絵本を通じて子供に「やればできる」というメッセージを伝え、自信と自立をサポートしたいと考えた。

プロジェクトのリサーチ

2016年の朝日新聞に掲載された定義によると、子供の貧困というのは「生活保護の受給基準以下の収入で暮らす子育て世帯」¹で、つまり生活に必要な収入を稼いでいない家庭で育てられている子供のことである。日本で起こっている貧困は相対的貧困で、厚生労働省が公表している相対的貧困率の算出方法を参考にすると、日本の平均収入の

¹ コトバンクで紹介された子どもの貧困の意味：

<https://kotobank.jp/word/%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E3%81%AE%E8%B2%A7%E5%9B%B0-1702100>

50%以下の家族は「相対的貧困」と呼ばれているようだ。²そして、厚生労働省のデータによると、日本の子どもの貧困率は13.9%で、ひとり親家庭の貧困率は50.8%、それは先進国の中でも最悪な水準であることはわかった。³しかし、日本では貧困、または家庭の違いを隠す傾向があり、「日本の子どもの7人に1人が貧困」⁴という厳しい状況になっていることは多く知られていない。日本における貧困が、子供たちに及ぼす影響は様々だが、その中で一番深刻だと感じたのは自己肯定感の低下である。自己肯定感とは自己価値に関する感覚で、自分の存在を認める感覚である。⁵自己肯定感が低くなると、「自分は何もできない」という気持ちが大きくなり、生活でのプレッシャーを感じ、そこから様々な社会問題（例えば貧困の連鎖や自殺問題など）を引き起こす。

プロジェクトゴールと目標

では、大学生である私たちには何ができるのだろうか。今学期、私たちができることの1つとして、サンディエゴの日本人の子供たちを対象にして自己肯定感をテーマにした絵本を作ることにした。子供たちに内容がわかりやすいように、絵本のキャラクターを動物にした。くまとねこが登場する。そして、この絵本を通して、主人公であるくまさんのような自立心と、ねこちゃんのようにいじめられっ子を助ける勇気を子供たちに持ってもらえたらと願っている。それから、サンディエゴのコミュニティーに貢献するために、地元の日本語補習校に連絡をして、子供に私たちの絵本の紹介と読み聞かせの機会を頂いた。

このプロジェクトの対象者はサンディエゴに住んでいる日本人の子供で、ゴールは三つある。まず、私たちは全ての子供の貧困問題を解決できないけど、日本の社会の子供貧困問題に関する意識を高めたいと思う。日本社会の意識を上げて、子供の貧困問題にもっと注目すれば、社会からの支援も増えていくと思う。次に、貧困層の中にいる子供にとって、自己肯定感を持つことは一番大切なことだと思う。データによるとこのような子供は、消極的な気持ちを持っている可能性が高い。いろいろなりサーチ情報によると、子供の貧困問題の一つに、その子供たちは両親や社会からの愛の感じ取りにくいという印象を持った。最後は絵本を通して、子供たちに「がんばれば自分もできる」というメッセージを伝えたいと思う。

² 内閣府：https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_03.html

³ 「子どもの貧困」日本の現状は？5分で分かる定義と、貧困家庭の子供の実例：
<https://kifunavi.jp/issue/poverty/status/>

⁴ NPOフローレンスの子どもの貧困を紹介する記事「貧困が子どもから奪うものとは、何か？【子どもの貧困】」：

<https://florence.or.jp/news/2017/11/post21268/>

⁵ 日本セルフエスティーム普及協会による自己肯定感の定義：

<https://www.self-esteem.or.jp/selfesteem/>

今学期の活動

連絡（エリック）

春学期が始まった当初、日本のNPOに連絡して、完成した絵本を日本のNPO団体や教育機関に寄贈するつもりだった。しかし、グループ内の日程と予算について相談して現実的な方法を考えたところ、最後にはサンディエゴにある日本語補習校を訪問し、絵本を紹介させてもらうことのほうが確実にできるという話になった。結果的にその方が地元コミュニティに貢献でき、渡す先の子供とも知り合えてよかったと思う。

絵本ストーリー（オイ）

最初は、自力で物語を考えようとしたが、グループワークとして少し独断すぎなのではないかと思った。しかし、新しい学期に新しいメンバーが入ったので、そのメンバーたちの意見を聞き、先学期から考えたもともとのアイデアと組み合わせて、そしてまたグループで相談し合って、やっとストーリーを完成させた。ストーリーが決まった後、絵本を形にするために、絵本のアウトラインのドラフトを書いて、そしてグループと相談しフィードバックをもらって、その繰り返しをしながら最終的なアウトラインを決めた。その後ストーリーをイラスト担当者に送りイラストが完成した後、絵本のナレーションやダイアログなど文字を入れて絵本を完成させた。

イラスト（アプルワ）

ストーリーが決まった後にキャラクターを描くことが私の仕事だった。キャラクターである主人公のくまさんとねこちゃんを描き、次に全体のデザインを行なった。これはキャラクターの色々な顔（横顔など）を描く事だ。キャラクターデザインの後にはイラストのドラフトを作った。ドラフトをメンバーに見せ、どこに文字を載せるのかを相談した上でイラストのファイナルドラフトを作った。子供たちに親しみを感ずってもらうために画材は色鉛筆にした。

印刷（ヴィエット）

私たちは最後に「48hrbooks」という会社で絵本を印刷することにした。この会社を選んだ理由は2つあった。まず、普通の印刷会社は1ヵ月ぐらいかかるが、この会社は配達、印刷、全部で10日ぐらいしかかからないため便利だった。そして、この会社は「Quick Print Estimate」というサービスがあって、絵本の大きさ、スタイルによるおよその値段を事前に教えてくれる。しかし、どんなに印刷の条件を変えても、印刷の価格が高くなってしまった。絵本の量を増やせば1冊の値段が下がるが、逆に冊数を減らし

たら、値段は上がってしまう。その理由で、何冊印刷しても、印刷の値段はあまり変わらなかった。結局、本の印刷費用を思ったほど抑えることができなかった。

日本語補習校ボランティア活動

私たちは5月18日に日本語補習校へボランティア活動をしに行った。アプルワは3歳と4歳のクラスでお手伝いをし、エリックとオイは5歳と6歳のクラスでお手伝いをした。ボランティア活動は朝の9時から12時半ぐらいまでだった。私たちの仕事はクラスの先生のアシスタントとして、クラスの手伝いをすることだった。子供と遊び、子供の事を知るためのいい経験になった。活動後、学校の先生からもフィードバックをもらった。学校の先生は私たちの日本語能力と子供たちへの接し方がとても上手だと褒めてくださった。絵本が出来上がった後、その補習校に本を寄付させて頂いた。

写真



図1. クラスで話し合っている様子

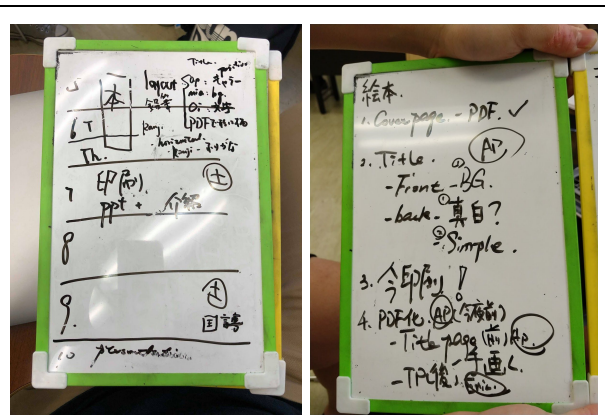


図2. クラスミーティングで取ったノート

自己肯定感:

- 自己価値に関する感覚
- 今のままの自分を認められる感覚
- 自らの存在を肯定する

→ 日本語システム普及のため

キヤククニ:

- 戦いはNHKの放送のやつ
- 兵士のくまさん (人の気持ちを知りたい)
- 戦争が終わって、家に帰らなくて
- 戦争で居るのをした (admission)
- お金がなくて、家に帰れなくて、一番近い村
- (猫/小動物の村)を救った
- オープニング: 「お話をしたいな...」ついでに...
- 活字を採らないと...
- 村を入れたときから、村人の注目を集めた

→ サイズ
→ 足の間
→ (お金がない)
→ いろいろあって、いろいろあった

村人のおこちゃん
村の子供と普通の人が
(人の気持ちを知りたい)

めくおれいさる
ココ

★小動物の村

家①: 匠の子で、森の中で材料を取りに行。止
けど、~~途中で~~途中で
出して、迷子になった

森に逃げたくまさんと出会って、男に
捕らるる手紙、で欲しいとお願いのた
途半という手紙、くまさんのおおかげで
一歩おもしろい、おもしろい、おもしろい
を採る

おこちゃん
村の人

図3. ストーリーのコンセプト



図4. 絵本の絵の完成



図5. 学生による本の読み聞かせ



図6. ボランティア活動後の集合写真

結論・問題点

子供の貧困に対する意識を高めることとして、絵本を作った後でどうするかという点が難しかった。まず、印刷までの過程をたくさんの小さい担当に分けたので、協調性はとても大事だった。みんなが自分の担当していた仕事を期限内に完成させないと、他のグループメンバーの仕事にも影響してしまう。そして、問題があったとき、柔軟性も必要だった。みんながいっしょに協力して、もっと効率的なやり方を調べておけば、様々な問題を最小限に減らせたかもしれない。次に、絵本を書いても、対象者の子供の年齢や日本語力によって表記や使用する語彙を調整しなくてはならないことも1つの問題だった。このプロジェクトは貧困の意識を上げるためであった。私たちは絵本作りを通して、どうやって貧困を感じている人に希望と自信を与えられるのかをよく考えることができた。そこで気づいたことは、自己肯定感を上げることは貧困を感じている人の責任だけではなく、周りの人の協力もないといけないということだった。

メンバーの感想

一年かけて、子供の貧困という社会問題から絵本を作ることにたどり着いて、そしてようやく絵本が形になったことに本当に感動した。子供の貧困問題は私たちの力だけでは解決できないが、どうしてもその問題のために努力したい気持ちが強かった。グループメンバーの考えもいろいろあって、なかなか方向性がまとめられなかった。しかし、絵本を作ることを提案したら、メンバーからの賛成があったので、それをプロジェクトの軸として活動をしていこうと決めた。絵本を作る作業に入ってから、様々な問題（ストーリーやキャラクターの提案やタイムスケジュールに遅れたことなど）があったが、柔軟性を持ってやっていくうちに問題の解決方法を見つけ、その難関をグループと共に乗り越えることができ、もともとはアイディアにすぎなかった絵本をやっと実物にすることができた。今までの過程を振り返ってみると、本当に感無量だ。（オイ）

今思うと、印刷の細かい調整とその難しさをあまり考えていた。何度も、絵やPDFのサイズの問題が発生した時、その問題が早く解決できなかったことで、他の仕事もどんどん遅れてしまった。もしこのプロジェクトの印刷担当をまたすることがあったら、他の印刷会社と比較をしてみたいと感じた。印刷の時間がもう少し長くても、その分費用は少ないかもしれない。また、原稿の締め切りがもっと早かったら、みんなは時間通りに仕事を完成させるモチベーションになったかもしれない。これはクラス中にクラスメートから紹介された「まだ早い遅くなる」ということわざの例になると思った。(ヴィエット)

私は今学期このプログラムに始めて参加したが、楽しくて、そしてとても有意義なプロジェクトだと思った。私の担当は日本語補習校との連絡だったが、補習校の先生にEメールを書いて、それが読んでもらえたこと、また返事をもらえたことが嬉しかった。コーディネーターとして自分はグループに貢献することができたと思う。そして、このプロジェクトを通して、自分の成長も感じられた。チームワークがうまく機能するためには色々な工夫が必要であり、特に自分のタスクを締め切り前に完成することは一番大切だと感じた。そして、私はクラスディスカッションでいつも決まったことをわかりやすくメモして、グループ全体の理解を同じにする努力をした。日本語は他のチームメンバーのように上手ではないかもしれないが、自分ができる精一杯のことをしてグループに貢献できたのはとても嬉しかった。(エリック)

私はこのプロジェクトに冬学期から参加した。冬学期の最後に春学期には絵本を作る事を決めたが、本当に作れるかどうか自信がなかった。けれども今学期はみんなで絵本作りに励み、ついに絵本が出来上がった。はじめにストーリーのアイデアが中々出て来なかったが、ビエットさんのおかげで兵隊さんのくまさんがねこ村に行くストーリーに決まった。ストーリーを決めた後はイラスト作りを始めた。初めてのイラスト作りはワクワクしたが、思ったよりも時間がかかり、とても大変だった。でも絵本が完成し絵印刷に出した時はとても嬉しかった。日本語補習校にもボランティアに行き、子供達と遊べてよかった。子供たちに絵本を紹介するのが楽しみだ。(アプルワ)



Let's Gengo | 「レッツ・言語」

<p>メンバー紹介</p>	 <p>笠嶋祐汰 3年生 専攻：日本語</p>	 <p>シャオ・ジーチン 3年生 専攻：日本語</p>	 <p>山崎ステファニー 4年生 専攻：人間生物学、日本語</p>	
 <p>ニーナ・アセロリーブマン 1年生 専攻：日本語</p>	 <p>クリステン(たみこ)・ベンドルフ 4年生 専攻：日本語</p>	 <p>ユリ・パン 4年生 専攻：認知科学、日本語</p>	 <p>牧野さこ 1年生 専攻：日本語</p>	 <p>ウエバー花 2年生 専攻：政治学</p>
 <p>ケン・ギント 3年生 専攻：ナノ工学、日本語</p>	 <p>ヒルダ・リュウ 4年生 専攻：数理・コンピューター科学、芸術科学</p>	 <p>リオン・ジェンキンス 4年生 専攻：日本語</p>	 <p>エリザベス・パン 4年生 専攻：文学</p>	 <p>ドリーン・スー 博士課程3年生 専攻：社会学</p>

プロジェクトの背景

レッツ言語は日本の大学で行っている留学サポートプログラムをモデルにしている。国際化の影響により、先進国では留学生交流が増えている。文部科学省によると、日本政府は2008年、「留学生30万人計画」を発表し、2020年までに日本への留学生を増やす計画を始めた⁶。JASSOの2017年外国人留学生在籍状況調査によると、日本に留学している学生の人数は267,042人である⁷。JAOSの日本人留学生数調査によると、2017年では、約8万人（79,123人）の日本人が留学した⁸。その内、アメリカ留学は1万9千人以上だ⁹。外国人労働者の人数を増やすだけでなく、グローバルな価値観を持っている人材を増やすために、日本人留学生の人数を増やすことは重要である。しかし、ヒューライツ大阪人権情報センターによると、日本に留学している学生は不十分なサポートや孤立に対する不安を抱えている¹⁰。

明治大学国際日本学部の小林明准教授の記事によると、日本から海外に留学している大学生の人数が減っているようだ¹¹。日本人の大学生が留学をしなかった理由の一つに言語能力の不安があると知り、何か役に立つイベントをしてみたいと思った。日本語を勉強しているローカル大学生と日本からの留学生をペアにすることで気軽に留学の悩みをシェアできる環境を作ることができ、言語的にも精神的にもサポートが提供できるのではないかと私たちのグループは考えた。

海外からの留学生の悩みを解決するために、多様な手段で留学生を支援している日本での事例を見つけた。例えば、日本のNPO法人国際交流の会とよなか（TIFA）は、経済的な困難を抱える私費留学生を対象に、保証人を必要としないアパートを安価で提供しているようだ。そして、日本各地の大学は留学生センターを設立し、留学生生活をサポートする情報やサービスを提供しているそうである。例えば、早稲田大学では、異文化交流センターで色々なランゲージ&カルチャーエクステンジプログラムを始めている。

⁶ 「留学生30万人計画」骨子の策定について：文部科学省." Accessed April 22, 2019.

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm.

⁷ "平成 29 年度外国人留学生在籍状況調査等について - JASSO." Accessed April 22, 2019.

https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_icsFiles/afieldfile/2017/12/25/data17_brief.pdf.

⁸ "一般社団法人海外留学協議会(JAOS)による日本人留学生数調査 2017." Accessed April 22, 2019.

<http://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/JAOS2016%E7%B5%B1%E8%A8%88%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%83%97%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B9171219.pdf>.

⁹ "一般社団法人海外留学協議会(JAOS)による日本人留学生数調査 2017." Accessed April 22, 2019.

<http://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/JAOS2016%E7%B5%B1%E8%A8%88%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E3%83%97%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%82%B9171219.pdf>.

¹⁰ "外国人留学生が抱える「生きづらさ」 | ヒューライツ大阪(一般財団法人" Accessed April 22, 2019.

<https://www.hurights.or.jp/archives/newsletter/section4/2017/09/post-27.html>.

¹¹ "当世留学生事情：なぜ日本の若者は海外を目指さないのか" Accessed April 22, 2019.

<https://www.nippon.com/ja/currents/d00390/>

このようなランゲージ&カルチャーエクステンジプログラムをモデルにして、私たちはレッツ言語イベントを企画した。

プロジェクトゴールと目標

「レッツ言語」はパートナーシステムを通じて、日本からUCSDに留学している学生のためのサポートネットワークを作ることがゴールだ。そのため留学生とUCSDの学生のソーシャルイベントを企画し、留学生をUCSDで日本語を勉強している学生とマッチングした。

UCSDは大きい大学なので、留学生は授業やアメリカでの生活に対する不安がある。UCSDの学生の間でも、キャンパスでは社会生活や友達付き合いが難しいという声を多々聞くので、留学生にも難しい可能性が高い。日本からの留学生はこの様なプログラムを使用し、もっとUCSDの環境に慣れたり、英語を練習したり、アメリカの文化を学ぶことができる。レッツ言語は、もっと日本語を練習する機会を探しているUCSDの学生たちにとっても、日本人と話せる有益な機会になるだろう。

活動報告

「レッツ言語」プロジェクトは日本人留学生とローカル（サンディエゴ）の学生たちをマッチングして、文化や言語の交流を促すきっかけを作ることが目的とした。まず、参加者のニーズに合わせたペアを作るため、事前にアンケートを行った。アンケート結果で参加者の趣味と日本語・英語のレベルを確認して、参加者全員がなるべく日本語と英語両方で楽しく会話ができるように工夫した。

イベントは2019年5月13日月曜日の午後5時30分から7時30分まで行われた。初めに、レッツ言語イベントの概要を説明し、スピードトークというゲームをした。出来るだけたくさんの人と会話ができるように、2分で話す相手とトピックが変わるというものだ。そして、マッチングの結果を公表してからパートナー／グループを作り、その中で自己紹介をしてから日本語で話す時間、英語で話す時間を決めて両方の参加者が積極的に交流できるように進行した。社交性が高くても初めて会う人の前では緊張する可能性があるため、食事をしながら気軽に話せる環境を作った。

その後「ジェパディ」をした。「ジェパディ」は豆知識のような質問をグループで答え正解することで獲得できる賞金の総額を競いあうゲームだ。私達は英語と日本語の両言語の質問を作った。景品を用意して、全体を大きく3つのチームに分けた。イベントの最後では、参加者にイベントの満足度についてフィードバックアンケートを記入してもらった。

イベント写真



アイスブレイクゲーム



ジェパディのチーム1



ジェパディのチーム2



ジェパディのチーム3



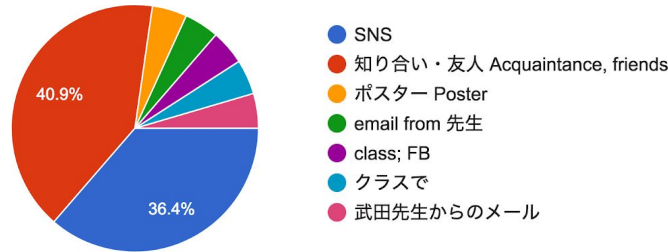
ジェパディのボーナスクエスチョン



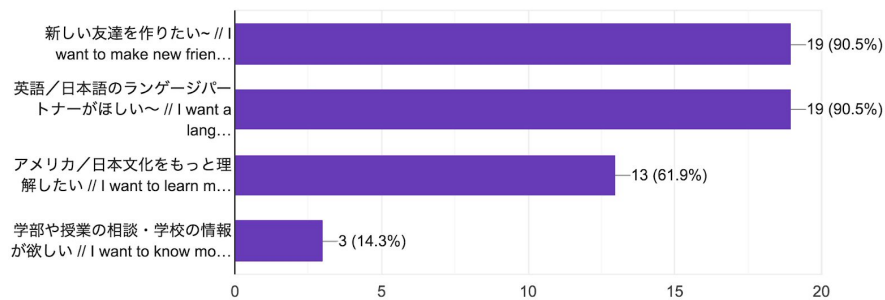
集合写真

フィードバックアンケート

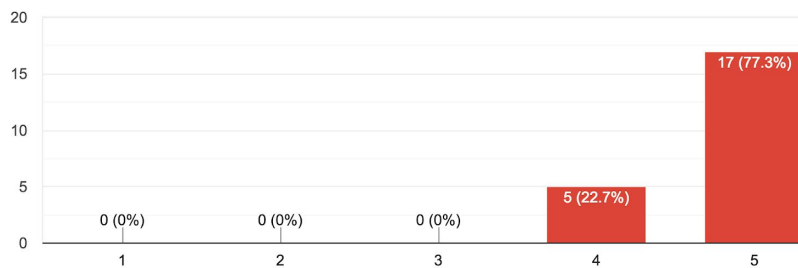
あなたは、レッツ言語を何から見聞きして知りましたか



どうしてレッツ言語に参加しましたか。



レッツ言語について、総合的にどのくらい満足していますか？



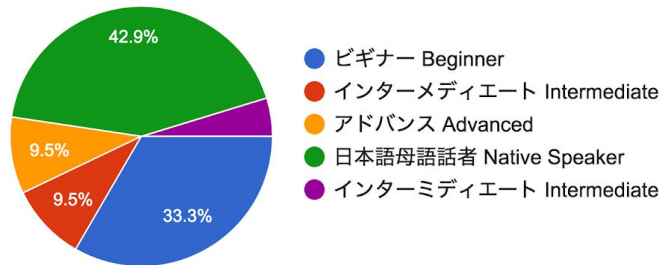
使った資料の写真

ポスター

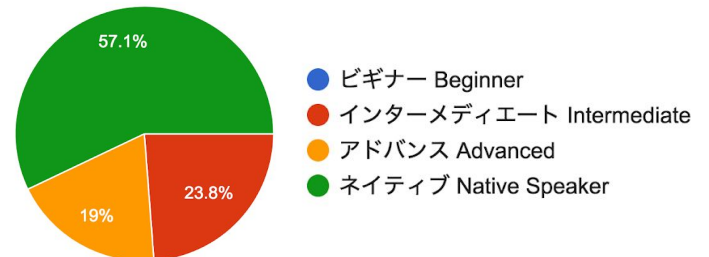


ニーズ調査

日本語レベルは...



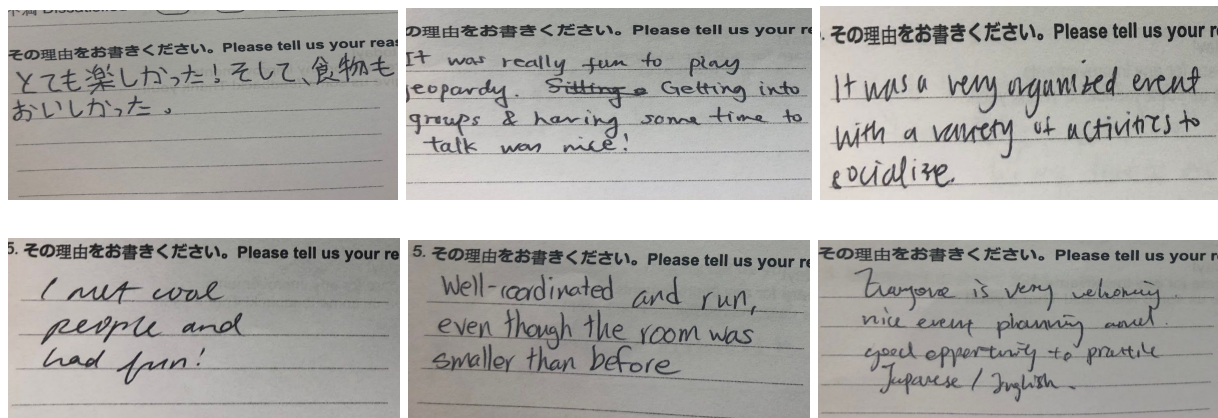
英語レベルは...



アンケート結果

イベント当日には22人の参加者が集まった。参加者が書いたアンケート結果によると、イベントの評価は高かった。22人中、17人がイベントの全体的な体験についても満足したと答えた。特に、イベントの雰囲気について、20人はとても満足したと答えた。そして、スタッフの反応についても22人中、20人はとても満足したと書いた。しかし、友達作りの点においては、10人しか満足したと答えなかった。これは今後の課題である。

参加者の声



感想

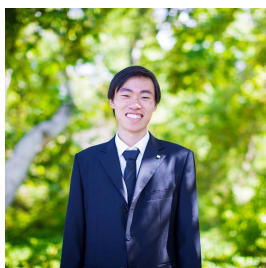
私の日本語スキルは十分ではないので、このプロジェクトをやる前に、とても心配しました。でも、グループメンバーに私の仕事を手伝ってもらったから、結果は良かったと思います。そして、今学期、広報チームは広報準備が終わった後、イベントのおもてなしチームになりました。そのチームと一緒にイベントの部屋を飾りました。イベントに

たくさんの参加者が来たので、私は安心しました。そして、イベントで留学生の英語を手伝いました。留学生が英語の言葉が分からない時に、私は日本語で説明ができたので、良かったです。将来、その留学生達と英語と日本語を練習するつもりです。新しい友達ができたので、とても嬉しかったです。(たみこ)

今学期のイベントは22人の参加者がいました。その人数は最初に予定していたより少なかったですが、私たちとしては、このようにたくさんの参加者に来てもらったことはとても嬉しかったです。最初の予定では、日本人留学生一人と三人のUCSDの学生で一つのグループを作ろうと思いましたが、Free talkという話し合いのゲームをすることになりました。参加者は列に並んで、順番に他の参加者と話しました。ジェパディーをする時に参加者を三つの机に分けて、その机にいる参加者が一つのグループになって、話し合って答えました。最初は、参加者を七つの小さいグループに分ける予定でしたが、部屋がちょっと狭かったので、難しかったです。今度もっと大きいイベントを開いたら、どのようにグループを分けるか、事前にもっと考えなければいけないと思いました。私の知っている限り、イベントの感想のアンケートでは、殆どの参加者はイベントにいい印象を持ったようなので、イベントはうまく行ったと思います。日本人の留学生もUCSDの学生も別の文化についていろいろなことを習って、新しい人と話すことができました。それは忘れがたい思い出になるかもしれません。(リオン)



ボランティア・講師



ダニエル・タン
(ボランティア)

子供の貧困という社会問題に取り組んでいるグループのメンバーとして、子供の貧困に対する意識を高めて子供達に希望を与えることで、この問題の解決にほんの少しでも貢献できるように作業してきました。私達が一緒に作った絵本の作成を通して、子供のメンタルヘルスはどれだけ大切なのか、そしてそれに対する意識がどれだけ欠けているのかをよく知り、感動して人間的に成長できたと思います。たくさんの素敵な友達ができ、そして優しく導いてくださる先生がいて、今年JAPN135を受ける機会があったことを本当に良かったと思います。



デレック・シェ
(ボランティア)

私は、秋学期と冬学期(春学期の場合はボランティアとして)で「子供の貧困問題」のグループに参加させていただきました。この問題は、見た目はシンプルですが、意味深い点(自己肯定感の重要性)が含まれました。このプロジェクトが今までこのように進めたことは、私にとって何より光栄です。



箱崎由紀子
(アシスタント)

春からこのクラスへ参加させていただくことになりましたが、学生のみなさんが日本語が上手なこと、研究熱心なことに驚き、同時に大変頼もしく思いました。難しいテーマではありましたが、武田先生のご指導のもと、両グループとも全員が力を合わせてプロジェクトを成し遂げたことは、素晴らしい経験になったと思います。みなさんの若く優秀なエネルギーが、近い将来にアメリカと日本の架け橋になることを願っています。ありがとうございました。



武田泉
(講師)

今年度は「子供の貧困問題」と「留学生のサポート」という2つのテーマに焦点をあてて学生のリサーチやプロジェクトを見守ってきました。1つ目のグループは子供向けの絵本を作り地域の日本語補習校に寄付をするという形で社会貢献ができ、素晴らしいプロジェクトになったと思います。2つ目のグループは日本人留学生を精神的、言語的にサポートし快適な留学生活を送ってもらうためのイベントを実施しましたがそちらも無事に開催でき、たくさんの方に参加してもらえました。どちらも有意義な活動となり、講師としても大変嬉しく思っています。